ISSN 2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて

第70号 2020年10月15日

編集・発行『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人 冨岡勝・谷本宗生）
連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 冨岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム 遠隔授業の一期一会	田中 祐介	2
逸話と世評で綴る女子教育史（70） ― 輪島聞声と淑徳高等女学校 ―	神辺 靖光	5
1985（昭和60）年度の大東文化大生の就職状況 ―「大学案内」（1987年）から ―	谷本 宗生	9
学校資料の教材化を模索して⑭ ―「修学旅行」を事例としたアンケート調査 ―	八田 友和	12
明治後期に興った女子の専門学校（25） 番外編 ― なぜ済生学舎は廃校したのか ―	長本 裕子	17
カレッジノベルの研究への道（16） ：久米正雄「受験生の手記」（7）	吉野 剛弘	22
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（25） ― コロナ禍における大学アーカイブズの現状② ―	田中 智子	27
木下広次に関する先行研究（1） ― 白石義郎の京都帝国大学「運動会」研究 ―	冨岡 勝	30
『久徴館』のめざすもの（7） 北条時敬の演説「慎独ノ学問」（中）	小宮山 道夫	33
体験的文献紹介(18) ― 近代日本女学校史の研究をはじめる ―	神辺 靖光	35
刊行要項（2015年6月15日現在）		39
短評・文献紹介		40
会員消息		42

コラム

遠隔授業の一期一会

田中（たなか） 祐介（ゆうすけ）
（明治学院大学）

例年、新学期から数週間もすると、受講生の顔と名前が次第に一致しはじめる。少人数の演習授業はもちろんのこと、数十名規模のディスカッション中心の授業でも、活発に発言したり質問をしたりする学生は覚えやすい。大規模授業ではそう簡単にはいかないが、毎週同じ席に座っていれば、前列の学生は何となく誰だか分かってくる。

受講生を徐々に認識すると、教室に向かう休憩時間にも、同じく教室に向かう横顔や後姿を見て、自分の授業の学生だと気づくことがある。人間の認知力とは不思議に優れたもので、教室では教卓から見渡す正面姿が中心であるのに、遠目の後姿でも、背格好や歩き方で誰か分かることがある。同僚や親しく付きあう友人であれば、当然と言えるかもしれないが、90分という限られた時間の授業を数回重ねただけでも、このようなことはしばしば起こる。受講生が次の学期も自分の授業を履修すれば、認知も深まり、人となりを大まかに知ることはできよう。だが、多くの受講生とは、その学期が終われば二度と会うことはない。いわば一期一会の関係であるのに、そうした本人同定の認知が働くことが面白い。

そのようなことをふと思ったのは、同時双方向の遠隔授業を終えた直後であった。そして考えた。情報技術の発達のおかげで、新型コロナ禍の最中でも、安定した品質のビデオ通話により、受講生と相対して授業を続けている。彼等の顔が見え、表情から授業への反応を窺うこともできる。しかし向き合うのは正面姿だけである。キャンパスに学生が戻ったとき、彼等の横顔や後姿を見かけたとして、果たしてかつての受講生だと認知できるのだろうかと。

横顔や後姿だけではない。ビデオ通話により正面姿と相対しても、背丈や姿勢は分からない。無意識裡に本人同定の手がかりとするであろう何となくその人の雰囲気も、対面時よりは覚束ない。そうなるとキャンパスで真正面に相対しても、気づかずにすれ違う可能性は低くない。

繰り返せば、多くの受講生とは一学期が終われば会うことはない。しかし新たな学期の開始後に、遠目の横顔や後姿から、あれは前の学期の受講生だ、と気づいたり、ひょっとするとそうかな、と感じることがある。あるいはすれ違いざまに、どちらかが気づいて会釈をすることもある。一期一会と割り切ったはずの思わぬ再会が、教員としては何となく嬉しく思ってきた。身体性の希薄な遠隔授業により、そうした機会に鈍感になるのは寂しく思う。

さらに言えば、遠隔授業はビデオオンの双方向形式ばかりではない。双方向ながら全員ビデオオフで授業をすることもあれば、e-Learning でのオンデマンド形式もある。視覚情報を欠き、音声が伴わなければ、身体性は遂に失われる。突き詰めて言えば、そのような遠隔授業の一期一会とは、人格と人格との出会いというより、限りなく情報と情報の接触に近い。

それでもなお、画面上の氏名に紐づけられる情報を綜合する中で、情報が人格として息づく瞬間がある。文字上でしか接触していない彼等が、果たしてコロナ禍の一学期を心身ともに健康に過ごしているだろうか、と想像もし、心配事があれば申し出るようにと、授業アナウンスとともに配信することもある。

身体性が希薄な、あるいは欠如した出会いであるゆえに、限られた情報には敏感になる。とりわけ個々の氏名に向き合う時間は確実に長くなった。対面授業が十分に再開した未来の履修者名簿に、確実に見覚えのある氏名を見出す時には、従来とは一味違った、ささやかな再会の喜びを覚えることになるであろうか。

新型コロナ禍を受けた遠隔授業により、大学教育のあり方は大きく変わり、理想的な教育方法とは何か、教員各自が再考を促された。対面授業、オンライン、ハイブリッドそれぞれの利点と問題点は、これからも議論の対象であり続けるであろう。そもそも大学とはどのような場所であるべきかという、古く根本的な問いも、かつてない新しい相貌をして迫ってくる。そのような未曾有の問いの大きさと重さに耐えながら、遠隔授業の一期一会を通じて、これまで教員個人として、日々の生活で何を大切にし、喜びを覚えてきたかを改めて実感した最近であった。

＊このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。

逸話と世評で綴る女子教育史（70）

輪島聞声と淑徳高等女学校

神辺（かんべ） 靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

東京の伝通院内にできた淑徳女学校は浄土宗の輪島聞声（もんじょう）尼が明治25年、芝の増上寺の尼衆教場を移してつくった女学校である。よってまず輪島聞声の尼衆教育から述べよう。

輪島　聞声

輪島聞声は北海道松前郡福山町の質屋・輪島屋の娘として生まれた。輪島屋は篤志家で娘も仏教に帰依していたが、明治9年、上京して浄土宗の福田行誠の弟子になった。さらに12年、入洛して浄土宗本山知恩院に止宿して輪島聞声尼となった。この頃から次第に尼僧の教育について関心を持つようになった。

そもそも日本の仏教は伝来当初から男僧の住む寺と女僧（比丘尼＝尼）が住む尼寺（あまでら）が並立していた。聖武朝の国分寺と国分尼寺のようなものである。室町時代には禅宗の五山制にならい尼寺五山が定められていた。皇族や公家の子女が住職となる尼寺もあり、在家のまま老後に髪を剃り尼になる者もあった。女性に寛容な浄土宗は各寺院に尼僧がいた。しかし輪島聞声が見るところ、浄土宗の尼僧は安逸に慣れて不勉強であった。明治19年10月、東京の浄土宗宗務所で宗会が開かれた時、聞声は尼僧教育に関する建議書を提出した。“わが浄土宗は開宗以来、全国に尼寺があるが、一寺一庵の規律だけで本寺本

山の規律がない。ゆえに本宗の尼僧は念仏宗のなんたるかを知らず戒律のなんたるかを知らない。徒らに時をむさぼり檀家に阿諛して歳月を送る。維新以来、書を読み文を学び日新の文化が進む時、檀家の婦女はこれでよいのか。ここに尼僧のために教則をつくり尼僧の旧弊を一洗して後日、社会に恥ぢざるようにしなければならない。幸い本宗は改革の機運がある。本宗の大学林にならって尼宗のための学校を設け尼衆の風儀を一洗しよう”大方このような趣旨である。

明治20年5月、福田行誡が知恩院の門主になり浄土宗の管長になった時、この願いが聞届けられ、翌21年2月、本山で尼僧教育が行われるようになった。同年12月、聞声は東京の感応寺住職に任ぜられたが、京都の尼僧教育が振るわないのを聞き、再び筆を執った。“世間をみるに文運隆盛、女子教育は今や社会の一問題になっている。女子の普通学校は言うに及ばず、専門学校もできようとしている。特に耶蘇教は別して女子教育に心を用い布教に婦人の力を借りている。いまの状況では仏教の教えは地に堕ちる。すみやかに仏教婦人会を開設してわが仏法を護らねばならない”。聞声のこの建議書が容れられて明治22年、芝増上寺内に東京尼衆教場が開かれ、輪島聞声がその監督兼教授に任命された。

増上寺についてふれておこう。江戸には北に天台宗の寛永寺があり、南に浄土宗の増上寺があってともに江戸鎮護の寺とされてきた。歴代の徳川将軍はこのいずれかの大寺が墓所になる。明治になってそのいわれはなくなったが、永年培われた権威はすぐには消えず、増上寺は京都の総本山知恩院と並ぶほどの権勢を持っていた。浄土宗が増上寺に尼衆教場をつくったのはそれだけの覚悟をもってはじめたことであった。けれども輪島聞声の教育意慾にとって、尼衆教場は飽き足らないものがあった。

明治24年9月、輪島聞声は浄土宗宗務所学監宛に普通女学校設置願を提出した。宗務所がたやすく許可したので聞声の女学校づくりがはじまった。聞声は小石川の伝通院の尼僧たちに相談した。ここで伝通院について簡単に述べよう。

東京市の西北・小石川区は旧時の武家屋敷に新時代の学校や営業所が開設されつつあったが、また旧時代からの寺院が林立した台地であった。寺院数は六十余を数える。なかでも壮大なのは新義真言宗の護国寺と浄土宗の伝通院であった。ともに徳川将軍家との因縁を持つが伝通院は家康の母の遺骸（母の法号が伝通院）を葬ったことで特別な庇護を受け、その勢いは京都の本山知恩院をしのぐものがあった（東京市編『東京案内』明治44年刊）。

浄土宗宗務所から女学校設置を許可された聞声は万事を伝通院の住職たちと相談して事を運んだ。まず校舎は伝通院の敷地に建てることにし、たまたま近くに立ちゆかなくなった私立中学校があったのでその建物を伝通院内に移築した。校長は歴史学者として著名な内藤耻叟に委嘱し、聞声は学校主任になった。内藤は水戸藩士で藩校弘道館教授、明治11年小石川区長、その後、群馬県中学校長をへて帝国大学文科大学で歴史を講じた。『徳川十五代史』の著者である。生徒はさし当って増上寺内の尼衆教場の者を移して明治25年9月2日、3年制の私立女学校を開校した。これが淑徳女学校である。

聞声から教えを受けたという教員の回想によると、“まだ小学校を卒業しない12、3のお嬢さんもあれば、17、8のお嬢さんもあり、丸髷で通学した奥さんもありました。学力も年齢も不揃いで、当時は女子用教科書がありませんから国文でも漢文でも在来の本を使うのですから時間割と合いません。教員が何回も議論を闘わせました。生徒は20人にたらない人数”というものであった。

聞声は学校内に起臥し極度の倹約をしていたが、月謝全科を修むるもの50銭、一科30銭で20人足らずではやっていかれるものではない。明治26年3月から年金300円が浄土宗会から扶助され、30年から400円に増額されたが経営の窮状は改まらなかった。それでも28年3月には卒業生を出し、32年には寄宿舎を新築して将来に備えたが、経営の窮状はどうにもならず、35年12月には遂に設置者を浄土宗にして貰うことを願い、翌36年5月2日、創立満10周年記念を機に浄土宗立学校にした。

淑徳女学校が浄土宗の直営学校になると元知恩院宗学校、増上寺宗立学校の教員を歴任し浄土宗学本学校長であった黒田真洞が淑徳女学校の校長に就任した。黒田は『大乗仏教大意』の英訳文で米国宗教界にも知られた人物である。明治39年12月には「高等女学校令」（明治32年勅令18号）による4年制の私立淑徳高等女学校になった。以降、着実に進展し、現在の淑徳中学校高等女学校につながるのである。

参考文献『淑徳五十年史』

1985（昭和60）年度の大東文化大生の就職状況
―「大学案内」（1987年）から―

谷本（たにもと） 宗生（むねお）（大東文化大学）

本稿では、1985（昭和60）年度の大東文化大生の就職状況について、「大学案内」（1987年）から紹介してみたいと思う。同上「大学案内」所収の「就職」欄では、「概況」の冒頭で「現在の経済社会は工業化社会から高度情報化社会へと高速度で転換してきている。このことはわが国の産業構造に大きな地殻変動を起しており、『重・厚・長・大』から『軽・薄・短・小』への経営形態の変化も、産業経済の国際化、社会のニーズの多様化等に対応しようとする企業サイドの努力、つまりは業種の多角化、ハイテク分野の研究開発努力、企業間ネットワークのソフト化などのもたらす当然の結果であるといえよう」（64頁）と、時代認識が端的に示されている。

続いて、具体的な「昭和60年度の就職状況」については、「昭和60年度は就職希望者1514名に対し、6145社から求人があった。伝統的に教員希望者の多い文学部は、昨今の全国的な教員採用枠の減少のあおりを受けてやや苦戦を強いられたが、依然教員決定者が約30％とトップを占めている。教員未決定者が安易に他の職種に鞍替えせず、あくまでも再受験を目指して努力しているのも本学文学部の特色といえる。60年度はいづれの学部においてもサービス業の伸びが目立つが、文学部においても約20％がサービス業関係に採用決定しており、製造業、金融・保険業などの伸びとともに業種の多様化が目立つ。経済学部は例年卸・小売業の大手企業に採用決定する者が多いが、60年度はさらにその傾向が強まり、43.9％を占めた。サービス業の伸びも大きく、情報産業が中心となっている。公務員・教員の再受験組を除き100％の就職率であった。外国語学部は最近の企業の業種

が、業際分野への進出などからクロス・オーバーしており採用傾向の特長を捉みにくいが、語学力と国際性を買われての採用が多く堅調である。卸・小売業を中心としているが、サービス業、金融・保険業、運輸・通信業の伸びも目立つ。法学部は例年公務員採用者が多いが、60年度も若干伸びて約17％を占めた。地方公務員上級職が中心となっている。その他卸・小売業が大きな伸びを見せ、法曹界、公務員への専願者を除き就職率は100％に近い」（64～65頁）と、全体的にみて就職状況は好調であるといえよう。

さらに、就職先エリアの「地域別就職状況については、当然関東地域が多く就職者数は全体の約80％を占めているが、最終的に勤務地が確定した段階ではさらにこのパーセンテージは上るものと予想される。ここのところ地域活性化の動きが強まってきており、各地域とも人材獲得に腐心している状況にあり、改めてUターンの是非について考えてみる必要もある」（65頁）だろうと記している。

なお「卒業生の声」として、外国語学部の黒原暢夫さん（三菱商事入社）は、後輩諸氏に向けてまず「面接がキメテ!!」とし、「一般企業の入社試験では面接での成績が高い比重を占めている。勿論どこの会社でも筆記試験はあるのだが、その成績は面接試験程重視されていない。なんとか筆記試験で点を稼ごうと思うなら英語をやっておくと良い。面接は普通3～5回。私は内定迄に計4回の面接を受けた」（66頁）と述べている。さらに「武器を磨け!!」とし、「『これなら!』という売り物がひとつでもあれば、やはり強い。私の場合は中国語である。北京の留学経験と共に、面接では全面に押し出してアピールした。売り物は外国語に限らなくても良い。…とにかく大学時代私はこれをやった、と自信を持って言える物があれば良い。なかったら今日からでもやれば良い」（同頁）と、先輩としての助言を行っている。

さらに文学部の大畑小織さん（東京都小学校教員採用）は、教員採用試験に向けての受験対策として、「最初に受験する東京都の出題傾向を調べました。ごくあたり前のことの様ですが案外軽視しがちのことです。これは、かなり重要なことであったと私は思います」（67頁）とし、「一冊の問題集を繰り返してやり、基礎をしっかりおさえて大きく教育の流れをつかみました。手を広げずに勉強したのが良かったのだと思っています。論文に対しては、過去の出題はもちろん、今日の教育事情の動きに関しても自分なりに書いてみることです。そして、書いたことに満足するのではなく、他の人に読んでもらうことを勧めます」（同頁）と挙げている。そして教員採用試験を目指そうと考えている後輩諸氏へ、「とにかく自分なりの教育観をしっかり持ち、表現できるということは二次の面接にも欠かせないことです。是非実習中に児童観・教育観を磨き、常に前向きの姿勢でこれから臨んでほしいと思います。教師への情熱が幸運を呼ぶと私は確信しています。皆さん、焦らず、目先のことにとらわれすぎずに頑張って下さい」（同頁）と、先輩からのエールを送っている。

学校資料の教材化を模索して⑭
―「修学旅行」を事例としたアンケート調査―

八田（はった） 友和（ともかず）(クラーク記念国際高等学校)

1.はじめに

本稿では、筆者が担当する授業（授業名：小論文）で行った「修学旅行」を事例としたアンケート調査の概要について整理・提示する。筆者が担当する小論文の授業では、小論文の執筆だけでなく、インタビュー調査やアンケート調査の手法を学ぶ機会も設けている。与えられたデータや題材に基づいて小論文を執筆するだけでなく、そのデータがどのような調査のもと、どのように作成されたものなのかという作成側の意図を理解するための学習として組み込んでいる。これは、アンケート調査やインタビュー調査の手法を習得できるとともに、作成側の意図を踏まえた、小論文の執筆につながる方策になるとも考えている。そこで本稿では、「修学旅行」を事例に在校生に関するアンケート調査を行ったため、その概要を整理・提示する。

2.修学旅行の歴史

ここでは、我が国における修学旅行の歴史について大観し、整理する。我が国における最初の修学旅行は、1886年に行われた東京師範学校の「長途遠足」だとされている（なお、「修学旅行」という名称は、「東京茗渓会雑誌」第47号（19年12月）に初見される）[1)]。また、1896年に長崎商業が上海方面に8泊9日の旅行を行っており、明治期には、我が国初の海外への修学旅行が行われている。[2)] 1912年には、新潟県において修学旅行の廃止令が出るなど、地域ごとに紆余曲折はあるものの、全国的にはその後も継続される傾向にあった。

1937年には、当時の国内情勢を踏まえて、伊勢神宮への参拝が奨励されるようになった。その際、参拝のための旅行の場合、運賃割引率・乗車区間等が示され、伊勢神宮への引率参拝が増加した。[3)] その後、修学旅行の実施に制限が加えられたものの、1946年に復活した。1958年には、修学旅行が教育課程に位置づけられた。[4)] その後は、災害や感染症の流行等に伴う、修学旅行の中止や延期は見受けられるものの、今日まで継続されている。

ここでは、修学旅行の一例として、伊勢神宮および奈良公園への卒業旅行の写真を提示する（写真1・2）。

写真1 伊勢神宮への卒業旅行 （出典）『ふるさとの小学校』p.39	写真2 奈良公園への卒業旅行 （出典）『ふるさとの小学校』p.41

以上のような修学旅行の歴史的変遷を踏まえ、「修学旅行の行き先としてテーマパークは好ましいのか、好ましくないのか」というテーマを設定した。その際、現在の小学生や中学生がどのような修学旅行を行っているのか調査する必要があると考えたため、筆者の勤務校の生徒を対象にした修学旅行に関するアンケート調査を行ったので、その調査方法および調査結果を整理・提示する。

3. 授業の流れ

ここでは、本授業（アンケート調査）の流れを整理する。

最初に、修学旅行を題材に小論文を執筆することを学習者に伝える。その際、修学旅行の現状を把握することを目的としたアンケート調査を併せて実施する旨を伝える。次に、アンケート調査の項目としてふさわしい内容について周りの生徒と話し合わせた。話し合いの結果、自身の修学旅行の体験談を5WIH でまとめさせる内容構成をとることで話がまとまった。アンケート項目は、google フォームで編集し、全日型コース1年生128名を対象に配信・実施した。結果として100名以上から回収があり、多くの修学旅行体験を収集することができた。回収した結果は、一人ひとりの修学旅行体験を大切にするという観点から、原文の状態で整理した。[5)]

4. 考察

本研究の成果として二点挙げられる。

第一に、他者の修学旅行体験を調査することで、複数の視点から修学旅行を俯瞰し、小論文執筆ができた点である。生徒が小論文を執筆する際、自身の経験に基づいて小論文を執筆するケースが多く見られた。それは、具体的な体験談を引用できる点では有効である。しかし、その一方で、自身の体験した枠組みでしか述べられないという欠点もある。本調査を踏まえた学習者たちは、他者の多様な修学旅行体験を知ることで、自身の修学旅行体験を複数の視点から見つめなおし、修学旅行そのものを俯瞰できていたように感じる。

第二に、学習者がアンケートの調査方法について学べた点である。小論文は出題形式でいくつかの種類に分けることが可能であり、テーマ型小論文やグラフ分析型などに分類できる。そのグラフから情報を適切に読み取り、活用するためには、出題側の意図を知る必要がある。

出題者の意図を読み解くためには、自らが出題者の気持ちや狙いを疑似体験することが重要であり、今回のアンケート調査ではそれら視点を取り入れたアンケート調査を行うことができたと考えている。

5. おわりに

本稿では、「修学旅行」を題材としたアンケート調査について、その概要について整理・提示を行った。

修学旅行は生徒が身近に感じやすい題材ではある。そのため、生徒自身の体験談のみに重点がおかれた内容構成になりがちであるという問題が内在している。よって、身近な話題を小論文テーマとして取り上げる際に、出題者の意図や思惑を知る活動を組み込むことは有効な方策になると考えている。今後も、出題者側の意図を意識した小論文指導を行っていきたい。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり、クラーク記念国際高等学校の石川眞椰氏にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

【註】

1)公益財団法人日本修学旅行協会ホームページ「修学旅行の歴史」p.1を参照。

2)前掲サイト「修学旅行の歴史」p.2を参照

3)前掲サイト「修学旅行の歴史」p.4を参照

4)前掲サイト「修学旅行の歴史」p.6を参照

5)アンケートの調査結果に関しては、筆者のresearchmapの「研究ブログ」で紹介している。

【参考文献】

・村野正景・和崎光太郎（編）2019『みんなで活かせる！学校資料－学校資料活用ハンドブック－』学校資料研究会

・島田雄介・神野晋作・八田友和2018「学校所在資料の活用～学校現場に聴く～」『考古学研究』第64巻3号，pp.10-19

・太子町立歴史資料館2019『ふるさとの小学校』太子町立歴史資料館

・公益財団法人日本修学旅行協会ホームページ（最終確認2020年8月14日）https://jstb.or.jp/

・公益財団法人日本修学旅行協会ホームページ「修学旅行の歴史」（最終確認2020年8月14日）

https://jstb.or.jp/files/libs/1738/201911271132453448.pdf

明治後期に興った女子の専門学校（25）
番外編 ― なぜ済生学舎は廃校したのか ―

長本（ながもと） 裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)

吉岡弥生は済生学舎で学び医術開業試験に合格した。唯一女子を受け入れていた済生学舎の女子学生締め出しが、弥生が東京女医学校を開設する動機となった。明治の医学界に多くの医師を輩出した済生学舎がなぜ突然廃校したのか。番外編として述べてみたい。

明治 23 年の長谷川泰（『日本医科大学の歴史』より）

済生学舎舎長長谷川泰（たい）は、天保13（1842）年、現在の新潟県長岡市で誕生した。漢方医の父宗済のもとで4年間修業し、長岡藩校済生館で蘭学・英学の初歩を学んだ。満20歳の時千葉の佐倉順天堂に入門し、5年間佐藤尚中（たかなか）のもとで蘭学と西洋医学を学んだ。慶應2（1866）年上京し、幕府直轄の医学所で西洋医学を学んだ。戊辰戦争の時は、新政府軍と戦う長岡藩医として従軍した。

明治維新後、新政府は医学所を官立医学校とした。2年1月、佐賀藩医の相良知安と福井藩医の岩佐純を医学取調御用掛に任命し、全権を与えた。長谷川は、同じく医学所出身の石黒忠悳（ただのり）とともに医学校の助教に任命され、相良の両腕となって近代医学の成立に深く関わった。しかし、4年、調停役の石黒が陸軍に引き抜かれると、ともに激しい気性で強引な相良と長谷川は文部当局と対立を深めていく。5年、長谷川が第一大学区医学校校長（旧医学校、5年8月改称）に任命されたが、先輩の相良に譲り、長谷川は校長心得となった。文部大輔田中

不二麿は、校長を長与専斎に更えることを画策した。それには参謀役の長谷川が邪魔だった。そこで、7年5月台湾への出兵が決定すると、ひそかに長崎医学校を廃して戦時病院とすることに廟議しておき、長谷川を設備の整った長崎医学校校長として表向き栄典させた。赴任にあたり、32歳の長谷川は結婚し、新妻を伴って同年8月赴任した。そのわずか2ヶ月後の10月12日長崎医学校は兵員病院に転用され、長崎医学校は廃止された。長谷川は罷免され、正七位の位記まで返上させられ、事実上文部省を追われた。かくして長谷川は、9年4月、本郷元町に医術開業試験をめざす済生学舎を創設したのである。

済生学舎は、36年8月31日、廃校するまでの28年間に、2万人以上が入学、1万人弱が医師免許を得、7千人以上が医術開業者となり、百名以上の女医が誕生している。済生学舎が医学界に大きく貢献したことは明らかである。

明治36年8月30日、日曜日の主要な新聞の広告欄に突然済生学舎の廃校宣言が掲載された。その理由は大きく二つである。

一、私立大学と改称すること行はれず、故に将来之を維持すること能はず。

大学としての認可を申請したが認められなかったことが第一の理由である。22年に本郷真砂町に敷地を購入し、校舎及び付属医院新築の図面設計等完結しており、10月から新築に着手する予定であるとして、私立大学組織に改める申請をした。しかし、文部省当局は私立医学校には私立大学の名称を許可しないと明言した。

二、普通の医学専門学校として今後維持す可き必要なし。

36年3月、「専門学校令」が発布され、第14条により、府県立医学校の運営に地方税で支弁することが可能になった。そのため、今後官立府県立医学校が続々と地方に新設されるだろう。ついては、私立大学

組織に改めれば格別であるが、普通の医学専門学校として継続し、国家の需要供給に応じ、医学者を養成すべき必要はない。
長谷川自身が書いた長文の廃校宣言の主旨はこのようであった。

済生学舎の主要な教員は直前に手紙で知らされたが、事前に何の協議もされず突然の廃校宣言で、教員も、夏休みが明けて上京してきた約700名の学生たちもただ呆然とするばかりであった。

しかし、済生学舎廃校の裏にはそれまでのさまざまな確執があった。文部省や東京帝国大学医学部を敵に回した長谷川の破天荒な性格や毒舌によるものも大きいという。弥生は、“長谷川先生の講義は権威があった。気性のきつい慷慨家で天下国家を論じたり、人を罵倒したりするのが好きであった。気に入らない先生の話を平気でやった。その先生が憤慨して辞めると、かねて目星をつけておいた人の所へ朝起きぬけに訪ねて行って、いきなり辞令を突き付けて、『明日から学校へ出てきたまえ』と否応なしに引っ張り出すという独特の手腕を持っていた”と『吉岡弥生伝』に記している。

唐沢信安著「済生学舎廃校の歴史」によると、済生学舎廃校の直接の原因は「医師会法案」事件だという。31年3月、長谷川は内務省衛生局長に就任した。全国の開業医の団体「大日本医会」が結成され、東京慈恵医院医学校を経営する高木兼寛が理事長、長谷川が理事に選出された。「医師会法案」を制定し、同年12月国会に提出した。法案は衆議院では可決されたが、貴族院で否決された。争点は、法案の第三条「医師は医師会に加入するにあらざれば、患者の診察するを得ず」である。東京帝大の教授らが中心になり約60名が「医師会法案反対同盟」を結成した。東京帝大を卒業してドイツ留学した医師と、医術開業試験合格者や漢方医出身の医師、府県立医学校出身の医師と同一の法律の下で律することは出来ないと、エリート意識の強い帝大派は主張した。長谷川は貴族院で独り防戦した。しかし、高木は、法案

の提出者であるにもかかわらず一切沈黙した。同僚高木の裏切りである。

勝利した「医師会法案反対同盟」者らは「明治医会」を結成し、長谷川の元書生で東大別科を卒業した川上元治郎、長谷川と親交のあった山根正治らも加わって「明治医会の医師法案」を作成した。長谷川の子分たちの裏切りである。「医学教育の統一論」を唱え、医術開業試験の全廃、官立大学と専門学校の二階級とし、粗悪な私立医学校の撲滅を申し合わせた。これを受けて文部省は秘密裏に高等教育会議を開き、32～33年にかけて「専門学校令」の原案を練った。長谷川・済生学舎つぶしが始まる。

もう一つの済生学舎廃校の大きな原因は、医師会法案と前後して、東京帝大の薬学者が医薬分業の「薬律改正」の政治運動を起こしたことである。中央衛生会委員を兼任する長谷川の対応を不満として、35年3月、審議中の薬局方調査委員が辞職した。内務大臣内海忠勝は委員を慰留するため、7月16日、薬局方調査会長の長谷川を辞任させた。内務省衛生局でも東京帝大出身の技官らが辞任した。総務長官の山県有朋は、長谷川に責任を取らせ衛生局長の辞表を提出させた。10月25日、長谷川は衛生局長の座を去った。

長谷川辞任5ヶ月後、36年3月27日、高等教育としての「専門学校令」が発布された。文部大臣の認可制で、1年以内に基準をクリヤーして申請しなければならない。手続きをしても不認可となれば即廃校となる。さらに、「専門学校資格標準」として、基本金・維持金の確立、建物は官立に劣らない事、学用患者数や講師の資格等を掲げそれらの一点でも欠けてはならないことが明記された。済生学舎を標的にしていることは明らかであった。

済生学舎は、17年3月、「東京医学専門学校・済生学舎」として文部大臣、東京府知事に申請し認可を得ている。したがって、長谷川とし

ては大学昇格を望んでいた。計画書を持って、文部大臣菊池大麓や文部省専門学務局長の松井広吉を訪問して、大学待遇の認可を求めた。しかし、松井は「専門学校資格標準」を示し、基本金、維持金の不足を理由に否定した。長谷川は、親友で当時中央衛生会会長の貴族院議員石黒忠悳を三度訪問し相談した。石黒は、文部省が済生学舎の認可を強く行わない方針であることを告げ、廃校を勧めた。ついに長谷川は廃校を決心し、36年8月30日の新聞紙上での廃校宣言となった。

39年5月、「医師法」が制定され、各地に任意団体の医師会ができたとき、幹部の大部分は済生学舎出身者であった。東京帝大医学部出身者は、東京帝大を頂点とする医師界を構築しようというねらいがあった。そのためにも医師界に多くの卒業生、勢力、権限を持ち、強い発言権、影響力を持つ長谷川の息の根を止めておきたかったのだろう。

済生学舎の廃校は、長谷川にとって「余が明治九年より三十六年迄培養したる一人息子を九寸五分で刺殺したる悲痛」(『長谷川泰先生小伝』)であった。長谷川は、45年3月71歳の生涯を閉じた。明治が終焉するわずか4ヵ月前であった。

参考文献

『長谷川泰先生小伝』山口梧郎著

「済生学舎廃校の歴史」唐沢信安著(『日本医師学雑誌』第40巻第3号)

『医制百年史』厚生省 『学制百年史』文部省

カレッジノベルの研究への道（16）
：久米正雄「受験生の手記」（7）

吉野（よしの） 剛弘（たけひろ）（埼玉学園大学）

前号に引き続き、今号でも「受験生の手記」を恋愛譚という側面から検討する。

1月に再び上京した健吉だが、最初のイベントは3月1日の一高の記念祭である。このイベントに姉と澄子とともに出かけることになった。まずは出がけの場面から見ていくことにしよう。

> 二人は姉の支度が出来るのを待ちながら、これから行く記念祭に就ての事を二三話し合つた。澄子さんはこんな事を云つた。
>
> 「来年は貴方に案内して頂けるわね。」
>
> 私は声を呑んだ。「さあ、どうですかねえ。あてになりませんね。」
>
> 「大丈夫よ。きつと大丈夫だわ。」
>
> 私は答へなかつた。そして何だか胸を抑へられるやうな気がした。つくづく去年入つてゐればよかつたと思つた。入つてゐれば、今日なぞは大手を振つて、かう云ふ装ひを凝らした令嬢を案内してやれたのだ。さうすればどんなに、澄子さんも喜ぶだらう。そしてどんなに友人たちが、羨望の眼を以て見ただらう。……

澄子が誰でもよいから一高生に記念祭を案内してもらいたいということならば、澄子は相当にステータスを気にする女性ということになるが、あくまで健吉が次の入学試験に通ることを想定して言っているのであって、これだけでは何とも言い難い。むしろ、一高生というステータスを気にしているのは健吉の方である。自分が一高に入れていれば、

澄子が喜ぶのみならず、それを友人たちに自慢できると思っているのである。

そんな記念祭の会場でも厄介なことが起こる。

南寮の入口で私の肩を叩く者があつた。驚いて振り向いて見ると、それは同窓の田中だつた。田中はまんまと去年一部甲に無試験で入つたのだが、メルトンの制服が羨しい程似合つてゐた。彼の顔には抑へ切れぬ得意さが動いてゐた。

「よく来たね。一人かい。」彼は訊ねた。

「いや。姉たちと一緒だ。」

「さうか。それぢや僕が案内して上げようか。何なら僕の室で休んで行かないかい。」

「有難う。まあ好い加減に廻り廻つて見よう。」

「さうかい。ぢや失敬するよ。もう少しすると西寮の仮装行列が出る筈だから、話の種に見て置いて呉れ給へ。奇抜なのがあるぜ。」

「有難う。ぢや失敬。」

何とはなしに私は彼を不愉快に感じた。それでかう云ふと、すぐ待ち合してゐた姉達に追ひつくため急いで彼から立去つた。

「誰方」と一緒になつた時、澄子さんが訊ねた。

「なあに去年推薦で入つた友達ですがね。あいつ自分で入つたやうに威張つてゐるんですよ。案内して呉れるつて云つたんですが、断つてやりました。」

「あら、案内して頂いたらいゝぢやないの。」澄子さんの顔にはちらと不平が浮んだ。

「なあに大抵解りますよ。」私はかう云ひ切りながら、心では可な

り不快だつた。

これを見る限り、澄子は誰でもよいから一高生に案内してもらう方がよいと思っている可能性がある。友人なのだからいいではないかと本当に思っている可能性も否定できないが、曲がりなりにも健吉は断っているのであって、それに不満を抱くのはお門違いである。さらにいえば、澄子は一高に合格しそうな、そして本当に合格した健次に乗り換えていくのである。澄子がコケティッシュかどうかはさておき、少なくとも Status-seeking な側面があることは確かである。

しかし、それは健吉も同じである。一高生である田中に案内してもらえば、澄子の心が動いてしまうのではないかと恐れているのである。Status-seeking なのはお互い様なのであり、そうでなければ健吉が一高にこだわる理由もない。

恋愛問題から少しずれるが、ここで興味深いのは、田中が無試験検定で入った設定となっているという点である。受験生の描写に関してはリサーチ不足の面があることを指摘したが、無試験検定は久米自身が通った道である。健吉が抱く感情は、久米が受けたであろう嫉妬心ということもできるのであって、健吉の田中への対応はその意味で非常に興味深い。しょせん無試験のくせに、とでも久米は言われたことでもあるのだろうか。

記念祭のクライマックスは、「運転手の夢」と題するおもちゃの電車を使った展示の前が混雑したために、移動がままならなくなったときである。その描写を見てみよう。

> 私たち三人も、そこで前へ進むことができなくなつて了つた。もう後へ退く訳にもゆかなかつた。それ処か却つて、背後の人にずん

ずん押しつけられて来た。私は澄子さんのすぐ背後にゐた。そしていつの間にか、澄子さんの首を余りに近く見た。淡い髪の香りがそつと私の鼻を打つた。私はすぐ間近に彼女の苦しさうな呼吸を感じた。

「澄子さん、苦しくはありませんか。」

「随分混むのね。」彼女は顔だけ廻して答へた。

「はぐれないやうになさい。」

「まさか、でも離れちや厭よ。」

私は偶然触つたやうにして、出来るだけ無意味に彼女の手を取つた。彼女も黙つて取らせてゐた。私は自分の慄へる掌の中に、しつとりと汗ばんだ、弾力のある柔かいものを感じてゐた。人混みは中々動かなかつた。彼女は何にも気付かぬ如く、肩越しに「運転手の夢」を覗き込んでゐた。そして身を動かす毎に、気づかぬほど微に手を握り返した。

さう云ふ中にも見物は、押され押されて推移した。吾々はやつとその稠密な処を抜け出た。私は先刻と同じく不自然でないやうに、彼女の手を放した。先きに立つた姉は、さつさと歩き出した。

一と通り寮内を見物して外へ出ると、そこの広庭には戸山学校の音楽隊が来てゐた。丁度聞き覚えのある「ドナウの流れ」を奏してゐた。三人はその方へ近寄つて行つた。私の心はいつになく浮立つた。何だかすべて自分のために、行進曲を奏してゐるやうに思はれた。東寮の三階で叩いてゐる相撲の太鼓も、入口の屋根の上に陣取つて、傍若無人に高声を発してゐる大学生の一群も、もう私の癪には障らなかつた。

吾々が帰途についた時には、まだ蕾の固い校庭の桜の梢に、ぼんやり傾きかゝつた春日が漂ひ残つてゐた。

考へて見ると今日は、圧迫と刺戟とを交互に受けた。家へ帰つたら疲れてぼんやりした。けれどもその底にひそやかな幸福があつた。そして興奮が澱のやうに残つてゐた。

「勉強しなければならない、今年こそはどうしても入らなければならない。」と思つた。ほんとに心からさう思つた。

机に向つたら、いつもより頭が冴えてゐるやうだつた。私は一高の記念祭に行つた事を、改めて誰かに感謝したかつた。

ここでいう圧迫とは、人ごみという物理的な圧迫と、一高生となった同窓の田中と邂逅したことによる精神的圧迫の双方を指すのであろう。刺戟は間違いなく澄子の手を取ったことである。

混雑に乗じて手をつないだことで、それまでの鬱憤の全てがなくなったという流れになっているのだから、澄子と手をつないだことは何にも増して重要なことだったということになる。しかも、勉強が捗ったというのであれば、手をつないだ甲斐もあったというものである。ただ、あいにく学習意欲が長続きしているようには思えない。健吉はどこまでも真面目な受験生にはなり切れないようである。

健吉と澄子の関係は、健次の上京により変化を見せることになる。次号では健次の上京後について検討してくことにする。

教育史研究のための大学アーカイブズガイド（25）
―コロナ禍における大学アーカイブズの現状②―

田中（たなか） 智子（さとこ）（早稲田大学大学史資料センター）

今号も前号に引き続き、現在の各大学アーカイブズの業務の状況について述べていく。2回目の今回は、国立公文書館等に指定されている国立大学アーカイブズのうち、（1）東京外国語大学文書館、（2）東京工業大学博物館資史料館、（3）東海国立大学機構大学文書資料室、（4）京都大学大学文書館の状況について紹介していく。

（1）東京外国語大学文書館

東京外国語大学文書館は「公文書等の管理に関する法律に基づく特定歴史公文書等及び本学の歴史に関する各種資料の収集、整理、保存、調査研究等を行い、教育研究活動等に資するとともに、収集した資料を閲覧、公開等の利用に供することを目的と」した機関である[1]。同館は本年3月2日、新型コロナウィルス感染拡大に伴い、閲覧利用を完全予約制としたが、同月27日に当面の間、閲覧利用を停止することを発表した。以降、現在に至るまでホームページ上に再開の告知は出ていない。

http://www.tufs.ac.jp/common/archives/index.html

（2）東京工業大学博物館資史料館

東京工業大学博物館資史料館は、「年史編纂と公文書管理法に則った学内文書の効率的管理体制を構築する必要性から」2013年4月に東京工業大学博物館内に設置された部門である[2]。博物館部門・資史料館部門ともに新型コロナウィルス感染拡大防止のため本年4月7

日より休館していたが、博物館部門は10月1日より展示室の見学を一部再開している。しかし、資史料館部門は未だ再開していない。
http://www.cent.titech.ac.jp/pg1166.html

（3）東海国立大学機構大学文書資料室

東海国立大学機構大学文書資料室は、2004年4月に名古屋大学文書資料室として発足したが、「2020年4月1日、名古屋大学と岐阜大学が法人統合し、国立大学法人東海国立大学機構が設置されたことに伴い、機構本部に直属する東海国立大学機構大学文書資料室とな」った。同室では①「大学文書」および「記録史料」の収集、保存、管理等、②「大学文書」および「記録史料」に関する調査研究等、③上記の調査研究成果をもとにした自校史教育等の教育活動、④「記録史料」の活用による本学情報の公開の積極的な支援を主な活動としている[3]。新型コロナウィルス感染症の状況に鑑み、本年4月20日より閉室し、Eメールや電話による特定歴史公文書等の利用請求書受付やレファレンスのみ行っていたが、5月16日、大学の活動指針の警戒レベルが緩和されたため、学外者の来室利用を再開している。
http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/newsindex.html

（4）京都大学大学文書館

京都大学大学文書館は、情報公開法および『京都大学百年史』編纂における資料の蓄積を契機として2000年11月に設置された。同館は閲覧室と歴史展示室を有し、①資料の受入・整理・公開、②調査研究活動、③広報教育活動を主な活動としているが[4]、新型コロナウィルス感染拡大のため、本年4月15日より閲覧室・歴史展示室共に当面の間休室となった。閲覧室については6月22日より事前予約制などの条件付きで閲覧業務を再開し、歴史展示室は7月7日より再開した。条

件など詳細については下記ホームページを参照していただきたい。
http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/%e6%9c%aa%e5%88%86%e9%al%9e/1159.html

以上、4つの国立大学アーカイブズの現状について見てきた。国立公文書館等に指定されている機関の中でも、感染対策をとりながら業務を再開している機関もあれば、未だ休館・休室している機関もあることがわかる。また、前号で取り上げた北海道大学大学文書館・東北大学史料館もそうであったが、閲覧室と展示室とで対応の違いも見られる。次号でも引き続き、国立大学アーカイブズの現状について見ていきたい。

1 「国立大学法人東京外国語大学文書館規程」（http://www.tufs.ac.jp/common/is/soumu/kitei/08_32bunsyokan_kitei.pdf）
2 東京工業大学博物館資史料館「概要」（http://www.cent.titech.ac.jp/DL/DL_Organization/Arch_abst.pdf）
3 東海国立大学機構大学文書資料室「大学文書資料室とは」（http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/about/index.html）
4 京都大学大学文書館「大学文書館について」（http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/about.html）

（つづく）

木下広次に関する先行研究（1）
―白石義郎の京都帝国大学「運動会」研究―

冨岡（とみおか） 勝（まさる）（近畿大学）

はじめに

半年ほど、オンライン授業関係の記事が続いてしまった。そろそろ、木下広次研究を急いで再開したいと考えている。本号では、「木下広次に関する先行研究の紹介・検討」と題して、木下広次関連で最近注目した論文を1本紹介しながら、頭の中を切り替えていきたい。

白石論文の内容と特長

今回紹介するのは白石義郎「京都帝国大学の学校創造 ―初代総長木下広次の「運動会」―」（『久留米大学文学部紀要情報社会学科編』第12号（2017年）である。この論文は、以下の章・節で構成されている。

第1章 目的と意義
　第1節 目的
　第2節 先行研究の検討
　第3節 研究の枠組み
第2章 京都帝国大学の立ち上がり戦略としての「運動会」の創始
　第1節 初代総長木下広次
　第2節 創設における京都帝国大学のシステム課題
　第3節 初代総長木下広次の「運動会」
第3章 分析
　第1節 「運動会」は成功したか
　第2節 木下広次の「身体教育」の思想：オックスケンブリッジモデル

第4章　総括と今後の課題

第1節　「運動会」の機能

第2節　今後の課題

第1章では、「学校創造」と「学校におけるスポーツの機能」の関係についての研究として、京都帝国大学の「運動会」がどのような機能を果たしたのかを考察するという、白石論文の目的が示されている。

第2章第1節では、初代総長木下広次の「運動」教育思想について考察している。

白石は、帝国大学法科大学の教授であった木下広次が森有礼文政期に第一高等中学校教頭・校長に就任した経歴を紹介した上で、木下が森の強い影響下にあったことを指摘し、木下の「運動」教育思想を形成した要素の一つとして、森の身体教育論があったと述べる。そして、木下が京都帝国大学「運動会」に関する演説で、「運動会」の目的が娯楽ではなく、士気の振作と体育の奨励であると述べていることが、森有礼と共通していると白石は指摘する。

森有礼文政期に第一高等中学校教頭・校長に就任したという経歴だけをもって木下が「森有礼の学校教育の構想の具現者であったことは経歴から明らかであろう」と断定するのは少々荒っぽく思われるが、森と木下の論の特長を大まかにとらえて考察しようという発想は興味深い。

第2章第2節では創設時の京都帝国大学には、立ち上がり戦略上の課題として、①京都帝国大学の「存在意味」を作り出す課題、②学内の融和と統一を創り出す課題、③入学生確保の課題があり、「運動会」がこうした課題を解決するための取り組みであったと白石は捉える。そして第3章第1節において、京都帝国大学の立ち上がり戦略としての「運動会」が成功したかどうか、上記の3課題から考察している。ここでの白石の「運動会」の成否に関する判断は、論拠となる事実が十分であるかどうか、やや危うい点も感じられるが発想としては興味深い。

感想

木下が京都帝国大学の「運動会」開催時におこなった演説の草稿が京都大学大学文書館所蔵「木下文書」に残されている。木下の教育方針をトータルにとらえる上で、木下の「運動会」に関する演説をどうとらえようかと従来から悩ましく思っていたが、この白石論文を通じて、森有礼の身体論との関係で読み解けるのではないかという、なかなか良いヒントが得られたように思う。

また、白石はこの論文において、ニコラス・ルーマンの社会理論やエミール・デュルケームの道徳教育論などを分析の道具として用いている。実証なしの理論だけの研究を行うつもりはないが、こうした理論を使って木下広次の教育について解釈する試みがあるのならば、理論の概要ぐらいは理解しておきたいと思った。

次号では、第62号以来ストップしていた「木下広次をめぐる史料」を再開したい。「木下広次に関する先行研究の紹介・検討」も、時々書いていきたい。

『久徴館』のめざすもの（7）

北条時敬の演説「慎独ノ学問」(中)

小宮山（こみやま） 道夫（みちお）（広島大学）

北条の「都会ニ居ル人」の評は手厳しい。「耳目高尚ニ過キテ実力従ハス」「高談詭弁実行ヲ知ラス」「便利ヲ知ルニ従フテ気力沮喪シ気象乏ク奮慨セス」「貴フコトナク重ンスルコトナク」「信スルコトナク強ムルコトナク」「行為修飾ヲ専ニシ思想皮相ニ止マル」と。そしてそれらを要約すれば「一般ノ気風ハ放逸軽浮ナルト思ハレ」るというのである。ではそのような都会に居る書生はどうであるか。

> 書生一体ノ風儀ヲ視ルニ嘆息ニ堪ヘス中ニハ暴酒乱淫ノ野卑ナルアリ色ヲ愛シ遊蕩ニ流レル柔弱ナルアリ是レ放逸ノ甚シキモノナリ囲碁花合ハセニ寝ル時ヲ忘ルヽモアリ談話ヲ貪リ切リ上ケヲ知ラヌモアリ学問ノ勉強過キテ運動ヲ怠ルモアリ是等行テ還ルヲ知ラサルモノ均シク自棄放心デアル事ハ免レマセヌデセフ

坪内逍遥『当世書生気質』からまだ7年ばかり後の世界では書生も大きくは変わっていない様子である。そこで北条は「是ニ於テ時ニ己ニ反リ常ニ心ヲ収ムルコトノ必要ヲ見ヨ慎其独之道是ヨリ外ナラス其ノ捷径ヲ克己ト謂フ是レ慎独ノ道ノ入門デアル」と「克己」に基づく「慎独ノ道」を勧めている。

> 試ミニ諸君各自家心中ノ状景ヲ分析シテ見ヨ鏡ニ対シテ自ラ醜ヲ耻ツトヤラ人ニ言ハレヌ汚穢卑陋ノ分子少カラヌナル可シ黙読時間ニ取締巡見ノ時手簡ノ認メ送ルヘキ者ヲ書キ延ハシテ居ル時「リーダ」ノ読方中ニ傍ラニ聞ク人アルトキ私ハ経験ガアリマスガ諸君モ多少ノ心当リノ有事ナル可シ時々ニ動ク心ノ挑発自分乍ラ愧カシキコトガアリマス苟モ汚穢ナル所アリ之ヲ打棄テヽ置カバ劒ノ一点ニ錆ノ出来タル時ノ如ク四方ニ広カリ積重リテ幾ント救フ可カラサルニ至ラン

何とも身につまされる指摘の数々、「手簡ノ認メ送ルヘキ者ヲ書キ延ハシテ居ル時」など、正に書きかけのメールや手紙が多数手元に留まったままにある筆者の胸をえぐる一文である。都会暮らしでも無いのにと思うと尚更である。

そして「此汚穢ナル処ニ向テ一躍矛ヲ刺ス之カ克己デアリマセウ此一躍ニ大勇ガ入用デアル」と、それを改善するためには大勇が必要だという。それは「昔シ加藤清正カ本多平ハ郎ヲ組伏セタルトキハ敵モ味方モ誉メハヤシタルナル可シ又藤田東湖ガ三タヒ死ヲ決シタルハ当時外舶来航シ日本ノ形勢カ危急ナルニ促カサレタレハナリト云フ」と故事を引き合いに出して対比させ、「自分ノ心中ニ矛ヲ刺ス勇気ハ之ヲ促カス危急ナル事情モナク又タ誰レモ誉メ呉レル見物人モナシ其張合ノ無キ処ニ勇気ヲ鼓スルゾ真ノ太平ノ勇気デアル誠トニ一層ノ勇気ナリ」と、誰かに注目されたり評価されたりせずとも自身の勇気をふるうことこそが「太平ノ勇気」というべき「大勇」であると述べる。

更に「又勇気ハ義ヲ行フノ道具ナルヲ知ラザルヘカラス朝タ行為言語ノ上善悪邪正ノ判断シ宜シク取ルヘキヤ宜シク捨ツヘキヤ其分界ヲ明カニシテ物ノ本末事ノ緩急其先後ヲ知ル是等ノ義ヲ見テ適従スル処ヲ知リ偖テ行トナリ言トナル事愉快ナリト謂フ可シ」として義と勇とのあるべき関係を説き、「所謂見義而不為無勇也ト自ラ困ンテ多少此言ヲ玩味シタキ者ト思ヒマス」と話を続けた。

北条は書生たる聴衆に対し、次のように都会暮らしの心構えを説き、また富裕層の出身者に対しては忠告をする。

> 諸君業卒ハリ世ニ一身ヲ立ツルニ当テハ義理ニ明カナルノ必要ト勇気ノ必要ヲ感ズルコト一層ノ甚シキヲ覚ルナル可シ今ヨリ平生ニ之ヲ養ヒ居ルヲ要ス時ニ臨ンテ出来合ハ当ニナラヌ人間ノ一生モ総テ差引勘定ノ規制ヲ離レス大晦日ノ用意ハ一月一日ヨリ初マル不断心ヲ放タス恭敬自守百年ノ画策ヲ定メタクゾアル
>
> 富貴ノ家ニ生レタル人ハ是等ノ着眼ガ最モ必要デアル如何トナレハ富貴ハ放心ノ媒助ヲ為ス更ニ多ケレハ也富貴ノ人ノ学問ノ為シ所此一点ヨリ愉快ナルハナカル可シ恭謙ヲ以テ王侯ノ位ニ臨ミ猗頓ノ富ヲ有シテ貧人財ヲ重ンスルノ心ヲ存シ豊足安逸ノ境涯ノ内自ラ足レリトセス富貴ノ家ハ亦究明練磨ノ地ニモ富ムノ道理ナリ是レ富貴ノ家ノ殊種ノ幸福デアル

演説も熱を帯びてきたところであるが、続きは9号まで待つことになる。（続く）

体験的文献紹介(18)

― 近代日本女学校史の研究をはじめる ―

神辺(かんべ) 靖光(やすみつ)(ニューズレター同人)

1965年のある日、東京文化短期大学の機関誌『文化生活』の編集者から〝来年本学の創立40周年になるから日本の女子高等教育史を書いてくれ〟と頼まれた。恐らく戦前に多くできた女子専門学校から戦後の女子短期大学への系譜を知ってわが東京文化短期大学のアイデンティティを認識したかったのであろう。それはよいことだと思って快諾したが、さて先行研究を調べてみると女子専門学校はおろか女学校史という専門書はないのである。かろうじて見つけたのは以下の4書であった。

1. 平塚益徳『我国に於ける基督教主義学校に就いて・女子諸学校』(『岩波講座・教育科学第16冊・昭和8年刊』)
2. 桜井役(まもる)『女子教育史』(増進堂・昭和18年刊)
3. 志賀匡『日本女子教育史』(玉川大学出版部・昭和35年刊)
4. 平塚益徳『人物を中心とした女子教育史』(帝国地方行政学会・昭和40年刊)

平塚益徳の2著は一つはキリスト教のミッション女学校で日本全国に目を配っているが女学校史とは言えないし、他の一つは仏教系も実学系も宗派にかかわらず各地の女学校を選んでいるが、書名通り創立者の伝記、思想中心で女学校史とは言えない。これに対し、桜井役(まもる)の『女子教育史』は日本近代女学校史を最初に開拓した専門書といえよう。

本書は時期を明治前期、明治後期、大正時代、昭和時代の4期に区切り、各時期の事件や風潮を簡単に述べているが、あとはすべて女学校のことである。即ち高等女学校、実科高等女学校、女子師範学校、女子専門学校を軸に女子の農業学校、商業学校、職業学校を配し、そのカリキュラム、教員、生徒の動向等を

概略している。またそれらを学校制度の発達変遷の中に位置づけている所が近代の学校史らしい所である。著者の桜井は本書執筆当時、文部省督学官であった。いたる所にその時期の教育統計が読者にわかり易いように掲載されているので安心して読める。文部省の統計が手元にあったのだろう。また要所要所に文教関係要人の教育論がちりばめられている。文部省の高官であったればこそ、それらの情報を知っていたのである。桜井は本書出版の前年、即ち昭和17年に『中学教育史稿』を刊行している。よって『女子教育史』はその姉妹編だと著者自身が言っているが、近代学校制度にくわしい著者のことであるから制度からみて日本の中学校と女学校は著しい違いのあることは十分承知の上のことであったろう。『中学教育史稿』に対して『女子教育史』としているのである。

志賀匡（ただし）の『日本女子教育史』は桜井の『女子教育史』と著しい違いがある。全体を古代・中世・近世・近代過渡期に分けてそれぞれの時代の女子教育を述べているが、当然、女学校は近代過渡期にわずかしか描かれていない。本書の根幹は各時代の女子教育の理念と実態を例えば近世であったなら公家社会・武家社会・農民社会・町人社会に分けて叙述しているのである。志賀は広島文理科大学卒業後、北海道各地の高等女学校長を歴任したあと、戦後、北海道学芸大学の教授になり、この著述に没頭した。引用書籍をみても大変な読書家である。古代から近世までの女子教育通史として完成度の高いものであろう。高等女学校長としては当然、明治以降の女学校に関心を持ったであろう。しかし戦前の学校法規の根幹は勅令で批判を許さぬものであったし、私立が多い女学校の沿革史は北海道の地では収集できなかったのであろう。しかし滋賀の近代女学校に関する研究の熱意は本書付録に添えられた「女子教育年表」に見られる。これは明治元（1868）年から昭和22（1947）までの80年にわたって「政治・法制」「社会・文化」「教育・女子教育」「教育関係文献」の4項目について必要事項を書きたてたもので、「女子教育」の項目は充実している。これだけみても志賀の明治以降の女学校研究にかけた情熱がわかるが、恐らく20餘年の歳月を

費した本書（序文）の後に近代日本の女学校史を書くつもりであったのではないかと推察する。

さて『文化生活』の編集者から近代日本の女子高等教育史を書くことを依頼された私は桜井、志賀2氏の著書によってヒントを得、『わが国における女子大学の沿革 ― 近代女子教育機関の発達 ―』と題して稿を練った。サブタイトルが論文の主題であるが「女子大学の沿革」とした方が短期大学の機関誌としてはアピールできると思ったからである。当時、専門学校令に準拠して女子専門学校になった私立学校の多くが各種学校が昇格したものであったし、日本女子大学校は専門学校でありながら大学校を僭称（せんしょう）していたのだからそのようなことは気に留めない。

①明治政府の女子教育観

②民間人による女子教育の推進

③女子高等教育機関の発生

と章立てした。

①は明治期の教育制度にある女学校とその実際を書いた。明治初期の政府は男女平等を教育の理念としたが、実態は女学校は極めて少なく〝女子にも教育を〟と啓蒙するのが精一杯であった。そして明治10年代には女子の教育は男子と別の、裁縫中心の教育にするということになり、明治後期になって漸く良妻賢母主義を標榜して男子の中学校と同格の高等女学校になる。

②は政府の官公立学校推進政策では振るわなかった女学校が、私立女学校として拡まったことを書いた。特にはじめはキリスト教プロテスタントが西洋風女学校を拡げ、次いでそれに触発された仏教諸派が、さらにカトリック諸派の女学校ができはじめたことを強調した。

③は明治後半期に女子の高等教育がはじまったことを書いた。近代日本の学校制度は明治のはじめ、小学校と大学からはじまり、両者をつなぐ中学校が明治の中頃になって漸くでき上るが、女学校はまず小学校、その卒業生が多くでるようになって高等女学校と下から順序をへて上級学校がつくられたが、20世紀の幕

が開く頃、突如、津田英学塾、女子医専、女子美術学校、日本女子大学校が東京にできた。これらの学校は明治36年の専門学校令に準拠される。そしてこれに倣(なら)って女子専門学校が明治末期、大正期、昭和初期を通じて続々開校してゆくのである。

以上述べた如く本論文は今後、史料を集め検討を重ね研究する設計図である。1966年3月、東京文化短期大学の『文化生活 ― 創立40周年記念号』に掲載された。

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

私が所属する大東文化大学の『学生手帳』（2020年）所収には、本年4月から学長に就任された内藤二郎先生の「明確で検証可能な目標設定を！」（56頁）という、学長挨拶文が記されています。本年前半からのコロナ禍のなかで、この内藤学長による学生への向けてのご挨拶はとても興味深く感じられます。まずこの『学生手帳』を活用し、「充実した学生生活の一助にしてください」と願う、内藤学長によるメッセージが伝わってきます。学生諸氏に対して、「明確な目標が持てると不安が少なくなり、毎日を生き生きと過ごせるようになるでしょう。またそのことで、様々なチャンスに出会うことも少なくないようです。一方で、目標が定まっていないと、何となく日々を過ごしてしまい充実感が得られなかったり、不安や迷いの原因にもなってしまうでしょう。そこで、まずは『やりたいこと・しなければならないこと』、『やりたくないこと・しなくてもいいこと』を書き出してみてください。…少し考え、調べ、自分の目標として掲げてみてください。この繰り返しによって、いずれ明確な目標が見つかるようになるでしょう」と掲げます。さらに、「その目標について、可能な限り期限や数値を設定してみてください。それによって、期限を迎えた時に目標が達成できたかどうか、何故うまくいったのか／いかなかったのか、を振り返ることが出来ます。そして、目標を達成できた時の自分自身を強くイメージしてください。イメージトレーニングを続けることで、よりよい成果が得られる機会が増えたり、自信にもつながるでしょう」と、学生時代に自らで目標設定し、それにチャレンジしていくという習慣を形成することの素晴らしさや大切さを強調しています。なお本学の『学生手帳』は、スマートフォンやパソコン、タブレット端末からもアクセス可能で、学生はいつでも閲覧できることになっています。（谷本）

コロナ対応などで半ばストップしていた研究を進めるために、最近、研究室の書棚からあふれている本をスキャナーで取り込む「自炊」を少しずつ再開している。自炊をすると、パソコンでも、ソニーの「電子ペーパー」でも読めるので、肝心なときに本が行方不明になって困ることがない。そんなことをしているなかで、以前購入した購入した村中李衣『マレットファン　夢のたねまき』（新日本出版社、2016年）を読むことができた。作者の村中李衣は、『チャーシューの月』などの作品で知られる児童文学作家・ノートルダム清心女子大学教授である。「マレットファン」というのは、日本語で「夢のたね」という意味で、タイの児童支援NGO（タイ国認可の公益法人）の名称である。

このNGOの創設メンバーの一人である松尾久美が、タイの貧しい地域での仮設図書館づくりの支援活動を通して信頼し合える仲間のギップとムアイに出会い、3人が中心になって色々な人を巻き込ながら、「こども」にかかわる「おとな」の交流会やタイと日本を結ぶスタディツアーを開く活動を繰り広げていった様子が生き生きとした文章で紹介されている。一見「分かりやすいが、ごく普通の文章」だが、読んでいるうちに活字が目に飛び込んでくるような思いを味わった。なぜだろうか。（冨岡）

会員消息

本年9月、教育史学会第64回大会にて、同人の小宮山道夫さんの研究発表「第四高等中学校生徒の進級判定に関する考察」をZoomにてうかがいました。報告者の小宮山さんによれば、高等中学校については不明な点も多く、生徒の教育実態についてもよく知られていないといいます。そこで、当時の進級判定上の教務資料（金沢大学資料館蔵）から分析報告していくというアプローチ内容でした。進級規程については、第四は当初第一の規定を踏襲しており、高等中学校としての全国的な教育制度上の整備をまずはかろうとしたのではないかと、会場で聞いていた私も率直に感じました。ただ生徒らの点表の実際から、外国語より数学や国語が当落のポイントになったようである・・という小宮山さんのご報告をうかがうと、当時の各高等中学校においては、教育カリキュラムや制度上はある程度共通しながらも、教育の実際としては少なからず異なっていた可能性もあり、それは生徒の学力や理解力、やる気の点にとどまらず、教える側の教員らの実力や教育指導の在り方といった点も含め、かなりその違いが生じていたのではないだろうか？とも、いろいろと想像できそうですね。後に、ナンバースクールの校風は云々などといわれたりもしますが、小宮山さんのように高等中学校時代からよく調べてみると、研究上の興味深い点がまだまだ新たに発見できそうな予感もします。（谷本）

勤務校では、毎年約20個の検定試験を実施している（いずれも準会場として実施）。漢字能力検定や実用英語技能検定、ニュース検定など有名な検定はもちろんのこと、Literas論理言語力検定や幼児体育指導者検定、ピアアシスタント基礎課程など、ユニークな検定試験も多数実施している。多様な検定試験を取りそろえることで、「これ興味あるかも…」「これなら受けられる！」と思ってもらうことを目的としており、検定試験を受けるハードルを低くしている。

検定試験を受ける理由としては「大学進学に有利になるから」「先生が誘ってくれたから」「親に言われたから」「自分の実力を試したいから」…など多岐に渡る。一方で、「落ちたらどうしよう…」「検定試験当日に欠席したらどうしよう…」と一歩踏み出せない生徒も一定数存在する。その解決手段として、今年度、生徒たちと一緒にたくさんの検定試験を受けようと考えている（今年度、Literas論理言語力検定、文章読解・作成能力検定、文書処理能力検定、普通救命講習などの検定を受ける予定）。一緒に伴走する人がいることで、「じゃあ、やってみようかな…」「一人じゃないんだ！」と思ってくれるかもしれない。そんな些細な期待を込めています。失敗してもお互いにサポートし合える雰囲気を今後も作っていきたいと考えている。　（八田）

土曜、日曜は、いつもオープンキャンパスや入試の業務なので、研究会や学会がZoomで開催してくれるのは、実にありがたいです。先日の教育史学会（第64回大会）も、貴重な研究発表を聞くことができました。小宮山道夫先生の研究発表は、旧制高校生の実態を知るうえでとても興味深かったです。　（山本剛）

このような時期ですが、9月に教育実習を終え、前後して高齢者福祉施設への介護等体験も終えました。個人的には、たくさん学ぶことがあり大変有意義な1ヶ月でしたが、このご時勢、自分などが行ってもいいものか、少し思い悩むことがありました。ふと考えてみると、今回の新型コロナウイルス感染拡大を受けて、人々が集まることのリスクが本当によく可視化されるようになったと思います。毎日検温とマスクを付けるようになったおかげか、コロナが流行り始めて以来風邪らしい風邪を一度も引いていない、というのも皮肉めいた話です。

以上のように実習も終わりましたので、今月号は執筆しようと意気込んでいたのですが、はたと修士論文の進捗が危機的であることに気づき、そちらをなんとか糊塗しようともがいていたところ、執筆の時間がとれなくなってしまいました。来月からはなんとか書いていければと思っています。（猪股）

周りの人たちに健康第一でご自愛をと挨拶をしながら、やはりこの頃の朝晩と日中との寒暖差、そして教室移動が不要となって部屋にこもりがちなため不意の外出で服装を間違えたりなどして、少し体調を崩し気味です。（小宮山）

時々ですが、文章を読んでいて、文字が光るように目に飛び込んでくるように感じることがあります。はっきり言語化できませんが、おそらく、その文章が分かりやすい上に一本筋が通っているような、好みの文体なのだろうと思います。どうしてその文章が光って見えるのか、その要因をもう少し分析できたら、私もそんな文章で論文を書き進めることができるのでは?と空想しています。一連のオンライン授業のバタバタが少し落ち着き始めていますので、ストップしていた木下広次研究などに時間をかけたいと思っています。

京都市学校歴史博物館から企画展「絵を語る言葉」（10月8日～12月1日）の案内をいただいたので、次頁に紹介します。（冨岡）

私の友人は、日本の古い物語や
歴史のなかの人物である。
私は友人に逢いたくなると
画室に入って、その人たちと対坐する。
彼女たちは語らない。
私も語らない。
心と心が無言のうちに相通じるのである。

――上村松園

上村松園 静御前（部分） 大正7年 元竹間小学校蔵

安井曾太郎 カーネーション 大正元年 元生祇小学校蔵

絵画的というのは、
自然の単なる模写ではなく、
線と色彩と明暗との
確固とした構成の内に対象物を
最も清新に表現することである。

――安井曾太郎

企画展

絵を語る言葉

令和2年 10月8日（木）
―12月1日（火）

※新型コロナウイルス感染症への対策のため，
期間・内容等が変更となる場合があります。
開館時間：9時～17時（入館は16時30分まで）
休館日：毎週水曜日（祝日の場合は翌平日）
入館料：大人300円　小・中・高生100円
※市内の小・中学生は土・日曜日入館無料

京都市学校歴史博物館
Kyoto Municipal Museum of School History